美濃陶磁歴史館だより

連続コラム　うちんたぁのお宝、なんやね？

第7回 馬頭観音に見守られた道

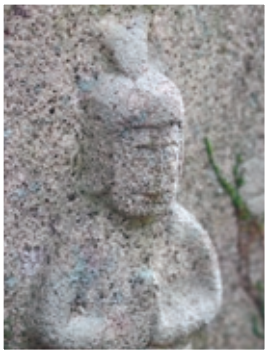
～曽木・中馬街道～

中馬とは、江戸時代に主に信州伊那地方の農民が副業として行っていた駄賃馬稼ぎが発展した荷物輸送業のことです。その中馬が通った街道が、いわゆる中馬街道です。東濃南部には、名古屋・瀬戸方面から信州最南部の根羽（ねば）へと至る街道が走っており、土岐市内では、柿野・細野・曽木を通っていました。この東濃南部を通る街道の他に、名古屋および岡崎方面からの街道、豊橋・新城方面からの街道があり、それらの街道が根羽で合流し飯田へと続きました。

中馬街道は、数多くの馬が荷を背負って行き来したため、旅の途中で倒れて亡くなる馬も数多くいました。そのような馬たちを供養するとともに道中の安全を祈願して建てられた馬頭観音が、中馬街道沿いには今も数多く残されています。今回は、曽木町内に建てられている憤怒相と柔和相という全く異なる様相を持った二体の馬頭観音をご紹介します。

馬頭観音は、馬頭明王とも呼ばれる憤怒相が一般的なのですが、曽木町内をはじめ、中馬街道沿いの馬頭観音は優しい柔和相のものが多く見受けられます。これは、激しい怒りの力で諸悪と苦悩、煩悩を打ち砕く明王としての姿よりも、馬の安全と健康、そして旅の道中を見守る優しい観音の姿が求められたからなのでしょう。

中馬街道沿いには、馬頭観音以外にも道祖神やお地蔵様、山の神などさまざまな石造物が建てられており、往時の信仰の姿を垣間見ることができます。馬頭観音には無病息災のご利益もあります。コロナ禍の終息を願いつつ、古き道を辿りながら先人の暮らしに想いを馳（は）せてみてはいかがでしょうか。



馬頭観音（柔和相）
一面二臂（いちめんにひ、一つの顔、二本の腕）
頭上の馬頭は不明瞭

馬頭観音（憤怒相）
三面八臂（さんめんはっぴ、三つの顔、八本の腕）
頭上の馬頭は明瞭

企画展のご案内

土岐市の古窯　～妻木窯下古窯跡群～

妻木窯下古窯跡群は、美濃窯の中では唯一、室町時代から江戸時代の長期間にわたり、同一丘陵内で窯業生産を行っていました。今回は、妻木窯下古窯跡群の資料が一堂に会する初の展覧会を行い、各時代の製品の特徴を紹介すると共に、窯が長期にわたって営まれ続けた意味について考えてみたいと思います。

9/12（日）まで

同時開催　収蔵品展「美濃桃山陶」

美濃陶磁歴史館
（☎ ⑤⑤1245）